



飛の集帖  
完

特 別  
A5  
6590  
24





寒葉齋追善

因影州

土佐

内郭社編  
先得菴撰



天正 序

源流の如く流るるを以て其の如く  
空糸高臺友風君ハ北村と氏せし其  
先君を以て其の如く流るるを以て其の如く  
おれく一游水其精業やうまをいふん  
傳れ其の如く流るるを以て其の如く  
君の如く其の如く馬の家小生色朝小韜畧  
の精練と事とも其の如く流るるを以て其の如く



諫以執事かの不知老之將至乃顔あたる  
嘗家父楓高の門と叩き能道の言を  
問ましる所渭出蓋北才あつて子く  
其の源流と窮めず父萬里と欲ふ後曰  
門乃老哲ありしを考く事不懶く或も  
若ふして泉客とれつと各自小其雅調と  
弄つてその郷黨州同蜜降子けり  
其も如くおれを此君とて是の親とら

志多んと其流議あり浮月軒の文以媒と  
して屬勸めりありせりれと例の譚遜あり  
事只安つて乃がてを遂おけ道地ふはらん  
也一向お語ひされ徐風菴昨蓮祖百回忌  
乃を向くして生縁良徳の國山縣なる一老  
松をまて文臺五御成との洛東乃  
双林精舎より百韻此無行あり其  
一物と楓高不授られと推くをり努



徒獲を玉櫛笥ニ見うるのてひ世ふいて  
ふ以喜ひ櫻と洗ひ身とあらざる高士を  
さう好り貝拾ひとて不きく延鹿子心  
り心と勢くあ徳深四方う波及し  
伊州筆れをや一の盛なる集も皆を流  
能清きに出るといふ趣しふはこころみせ  
月乃をあ炎熱う侵せしに良薬はふのこ  
苦くして邪悩退き得ん孝子門葉カと

とてて介戸あははととと露るると乃  
勢となく文月冒とふ曉とれ支友と  
あてむひぬ然然何よりあるととの生者  
必滅の如ひ歎きて帰るべきなる稱を無  
得房主の法柄りはるり五基山竹林積  
舎は靈壇と莊嚴と捨る合れして五七子此  
連夕と持名函魂となくさ免同社のまふ  
とけく勢くもそ業月彼岸然とく免



なりき今、其集と依る、木小彫る多方  
風交の諸彦丹贈むと、後、父乃由  
縁ありて序と後礼堂曰社乃も、免  
理を記み、阿の孫を拙と顧す、遂に毫  
と下にこそ志の純

安政二年冬

仲秋の日

四時鏡旭松



寒葉齋遺吟

折々梅地小おれ、如ふ不いれ

露亦免る腸、あゝ世に叶る

石乃平路、金おれ、アそ、流きそり

埋火のや、管て、そ、保ちらむ



予の仇道は鞍社せし鶺鴒  
翁の暮年やして僅く一二の  
推敲と問く翁没後を寒  
葉作とみさう山お禁とたのみ  
しも手あふふして松生荒小  
たも移ると此作も北郊の  
煙とちり如鳴呼

無得菴

松窓

朝露と手小撥れさるる皆此味  
言乃紫も如き此月乃寂  
可月

浴よりまうつと後もと従をそく	左邊
屋の強し店乃れ入	半開
海能中流さやう那う山とある	洒薙
日私を志れさ夕明うさん	柔窓
うあ合し糖乃くくれむ乳	松二
裁ておく茄子の初もの	古仙
河符と之をこひし手習呪	可燃
己ひし哉名あり伏え淀島羽	壺仙



漏うけう雷盆を傳へ塞まけく	尺山
茶の沸く肉をまをぬ痰後	吾久
時計うの毛ぬき合う城乃鐘	魯牛
豆の利目ウ馬乃はやく	藤里
不限者と見せぬ梅枝葉床	橋南
裸不しより伐まらうの竹	其勢
日半日あふ六甲梨か死を此月	眠子
ひびきし梅さへ毛是乃射	時醉

軸物とうけりる写ふ掃除して

こふ売てを並ぬをちし

梅志

梅枝の花みやさし記枝能り

延之

陸の聲り能あきる不るはな

止三

旅用意財をも待たぬ御能く

穆風

三才

後居をよおぬ世の中

松

賑しや漁事祈の管を鼓

一琴

むしり戯場を御法度の外

花風

六



南京の皿は穂穂の不似合さ  
 空ふかりて去るの片腕  
 採飯と既中おきる下乗さ記  
 くれを始る物乃闌 淨  
 稗上の餅小砂糎か天赦日  
 何れを極きもの細く極の音  
 雪駄てふ又志ても乗る柴車  
 但馬心来そ竹馬乃友  
 蔵六  
 玉葩  
 里伯  
 煮泉  
 一翫  
 挑英  
 佳水  
 梅隣

待とよむ名のつき初る影うそや  
 芋ぬき争れし冰の味し  
 誰捨し可惜帛紗乃露 湯  
 三輪此處にふ田に窓牙を  
 娘しこそ手おあふそある常  
 稽昔波音絶く絶す  
 立り多て又地小登り山 鹿  
 多ふそ珠乃楠々 旗  
 撫泉  
 葦笠  
 其外  
 一止  
 只常  
 求我  
 遊耳  
 波英



暇乞すれは子よ神にり  
 牡きんの蒼笑白化まる  
 明抄る月影るより杜より  
 ぬれし御律のまけ乳きそ  
 檢校と守むと金つ杖より  
 風と水とえそ黙る風鈴  
 境内冬蒼山交らぬ花乃雪  
 葩煮る浮出る純麗玉經  
 其友  
 鈴水  
 月化  
 綿路  
 龍二  
 琴石  
 芳洲  
 不石

三才

銀板よりふみと飾す若荷外  
 荷痛と愈る孝の徳  
 藪際の高地は鏡不日出  
 変形をさふりれ家鏡  
 一目乃却て負きそ然念さ  
 踏も平敷の破れる鼻高靴  
 碑の銘ふ義士は枝葉のそうれ寸  
 風呂屋後きにかみ継ぎ  
 春朝  
 也水  
 芦雪  
 貞甫  
 松和  
 三好  
 五葉  
 和光



姉娘假粧の科小田と波	清流
指かてふうける灸点	小蔭
名箇村無垢を玉ふのあそび	花流
何てあらふ世床の至物	結涼
さこくと併拵まゝ乃月	是同坊
稲穂雀の口乃さうふ	可水
<sup>ミ</sup> 辰父入りしぬ吳人との親の悪痴	桃水
先手合くあゝ新ハすむ	三花

何やうや障く疲し汗の草	茶夕
四季色の一ぬ豆腐菊 菊	其曉
永橋をくれつきふうの柔の安く	奔夢坊
世界の廣いものゝ浪人	慈挑
泊蕙をふことに世と世と	如石
浄寺うとわ家結や隄也	呂石
温泉地所ふ茶ふ合ふ水の不自由	一目坊
又あゝう終くうのくんと待	雲泡







各遊悼乃佳什何れと誓ハ  
靈前了それつく夜母誓  
四喜此好此と乞名孫と次

山焼のあつりち雲の月取外  
障乃菓う茶の木一株これと  
出る船乃竿にちるんや草の菓  
五島川軒や雀の門ちる一  
るみ子や澄切てゆく水の流  
芳洲

スミエ  
眠子

スミエ  
芦雪

スミエ  
夢坊

スミエ  
月化

スミエ  
芳洲

葉杯のよけありとこれり  
言借く歌と入り出る露時雨  
子了母乃籠面きさうや於乃身  
一撮之夏州ぬくや苔乃中  
川筋と杯の煙夕。これ  
まの勢ふ敷そけう浪納所  
松咲く女と嘆のほまう乳  
燈り笑ひうふや表紙雖

左川  
如石

茶夕

菘水

戸ハ  
洒羅

ウサ  
三好

松

山蔭

貞甫



牛乳をうり除く 樹の小里うり  
 待りし雪をうり年終梅をうり  
 曙や鶴啼枝をうり月  
 梅志  
 縮あや瞬く中ふ又此をうり  
 波英  
 おとし海や花の吹不此月の暮  
 一止  
 藤乃波世荒る風情や谷あり  
 鶴仙  
 水く濁る庭をうりけしお系辭  
 延之  
 数足りて空うなりうり若菜梅

引路や葉をうり後海雲の膚  
 持破きし骨正月の扇をうり  
 是同  
 火の極るころやお系うり日照雨  
 可水  
 ありあいの口お不ぬく来りうり  
 和光  
 耳洗ふ温るの森覺や子規  
 松二  
 三掃山や志をうりおぬ杉の香  
 里伯  
 文撰をうり花の友あり冬をうり  
 遊耳  
 やて羽子うり眼のゆくをうり思ふが  
 龍二



春の月家のうしろに静に  
府 呂石  
 這ひ男の子を寝させて隙一羽  
蘭窓  
 いるつ方のぼろ／＼と月さね哉  
竹葉  
 蔭の中にあつ梅をき月和の光  
古仙  
 寝／＼き彼まゝ海に流し流し  
撫泉  
 朝舟の出と詠はすれ未／＼  
雲旆  
 火と向て暮る海を／＼小妻／＼  
穆風  
 寐と／＼きう板と啼く花の山移  
結涼

我花／＼返さく／＼伸る葵／＼那  
一計  
 小うあき／＼秋／＼寝／＼う萩の音  
佳水  
 虫の音もさうとさう／＼き／＼い  
只常  
 雲／＼や柿のそれ／＼月と記家  
梅鄰  
 花／＼ふ／＼れ／＼き／＼んや／＼お／＼さ／＼く  
煮泉  
 野／＼／＼くや／＼解／＼／＼あ／＼／＼雨の音  
尺山  
 牡丹／＼／＼笑／＼／＼／＼移／＼／＼土／＼／＼舞／＼／＼／＼工／＼／＼夫／＼／＼森  
藤里  
 足／＼／＼ふ／＼／＼春の／＼／＼冬／＼／＼／＼山／＼／＼砂／＼／＼／＼／＼れ  
一琴



音のせぬ雨乃木の芽にかり、  
 何處にも流決茅や木の葉舟、  
 佇向く江に三橋此をこりぬ、  
 稍志ちし一松の息を小春終、  
 平務の身中松明控り山つら、  
 遠的能矢る元流る莖のま、  
 紅葉又や赤くく弱る火の始末、  
 立むふ山松くさし一憚乃花う、

橋南、  
 琴石、  
 春朝、  
 五葉、  
 清流、  
 花流、  
 一器、  
 玉葩

花うさ一誓しとある中ある恨、  
 去る雨乃中に辰風是煙りては、  
 山麓と麻との骨や赤ひとり、  
 虫の啼くをさあうと中の園、  
 秋風思うとさうら女や松乃内、  
 松う勢の身ををれくはてしれ、  
 雨とわ乃授けをくし村紅葉、  
 ちる露のうせたまふし居士の前、

女梅月、  
 其外、  
 冷氷、  
 慈挑、  
 菫葉、  
 如蓋、  
 一翫、  
 旭松



石の髻牙西りてハ赤ニ多利 四郭 止三  
 佛壇の外ハ燈トナシ一ツ砧 左運  
 瘦骨の禮褻了係ぬ雲長ハ孔 蓑笠  
 苔未ひハハ性根了軒の氷柱哉 半函  
 うをひすや一里云々紀朝云々 時醉  
 啼止了了うハ活字云々かつこ鳥 魯牛  
 皆の挿もろ書定かると郭云 花風  
 良ハハ活字こほれハハ字は云々 也水

魂とあまらふうハ活の動き云々 吾久  
 田乃ハ然然ハハ行ぬ足乃ハ 其勢  
 蓑云々ハ草云々ハハぬ茅云々ハ 對山  
 万葉の指ひ歩りや山乃 家 求我  
 浴ハ勢ハハ紀夕息云々ハハハ 壺仙  
 扇も皆布目瓦や松のハハハ 三花  
 美ハハハハハハハハハハハ 花仙  
 又ハハハハハハハハハハハ 可然







世の人乃其れを色とす不初相魚府 牛牛  
 不意と身も暮て暮らう言此等 涼掃  
 泥是うなるくぬきとぬ茶式、 其松  
 笑くして庭とぬ免く橋、乳、 竹塙  
 雲うのれくれてましく夕蔭、 二徑  
 落石物や流し足跡まのく人、 掬仙  
 日裏へと日暮乃あり山住くら、 素白  
 浸濡の務紙をけとび物産哉、 桃園

落さねと木もほら河も木多分、 一費  
 雲の秋かたる成栂の海うれ、 壽樂  
 疣瘰も牛一は暮らや暮の草、 其桃  
 丁子湯の肌うまらや庭此雪、 柳齋吉原  
 鶺鴒乃乃あふく来る算えの靴、 遲翠左川  
 さひーさや月とあまて秋の雨、 白龜  
 紗の意は松のむらう夕うね、 吾山不詳  
 麦前乃土産う鶴の羽うひるを、 此君中村







うたふかしくぬき粟多し小柴山 三十五 龜仙  
 春のちやゆれぬきし舟の夏 三十三 仲也  
 下詠もきて出く雪を迹し 三十二 雨橋  
 雪くるを山内へ詠へ 三十一 雪洞  
 善結や落花もぬふさうのち 三十 子沆  
 武士のぬれ惟子や洗ひ馬 二十九 馬佛  
 捨捨くま多きくや琵琶法師 二十八 二樂坊  
 嘆くもいふうとふくれり松板引 二十七 府市風

山ととや氷乃上の

ころ水木

魯松菴

いさこの原忠と報しきふと  
 老手に拙ふはとほまけ集以  
 侍とて未ふうの次とて

月の影踏んて若州小頼寫之れ

三十三  
 鷲仙





盡友風士認辰之社設徧延為

追崇予亦拾茲以二千八文字

華——取代未茲云

滑稽送墨冊成堆身後猶留

矣毅才窓外芭蕉如有書錄

之應護善文臺

為梅花雪月悅採





